

第14回せいいい看護学会学術集会

—交流集会3—

—中東遠地域の看看連携を考える—理想的な地域共生社会をめざして—

林 泰広¹⁾

企画者・司会：袋井市立聖隷袋井市民病院 病院長 林 泰広

演 者：1. 杉山久美子（中東遠総合医療センター副院長兼看護部長）

2. 平野 一美（すずかけヘルスケアホスピタル看護部長）

3. 赤堀奈緒子（訪問看護ステーション掛川所長）

【企画の背景】

我が国は超高齢社会を迎え、高齢者が病気を抱えても、住み慣れた地域でその人らしく生活する、「ときどき入院、ほぼ在宅」というあるべき姿、「地域共生社会」を掲げている。患者を取り巻く構造の変化の中で、住民の健康維持には、病院だけでなく地域の診療所や在宅診療、介護施設なども重要なステークホルダーとなっており、それぞれに看護師の活躍の場も拡大している。

患者は病状に応じて、急性期から回復期、在宅療養など切れ目なく医療もしくは介護が提供される仕組みとなつてはいるものの、病床機能別の医療施設間、介護まで含めた関連施設間の円滑な連携には課題が存在している。連携の質を高めるためには利用者である患者にとっての最適が求められるべきである。しかし病病連携や病診連携、医介連携など様々な連携において、連携する施設の立ち位置によって、患者への視点や対応が異なっており、そのため重要な患者情報が正確に伝言されていない可能性がある。連携の円滑化のためには各現場で患者に寄り添う看護師の視点が重要な要素となる。今回の交流集会では、急性期医療、回復期・慢性期医療、在宅医療の各現場で活躍する演者にそれぞれの立場から看看連携について語ってもらった。今回の集會を本来の患者中心の看看連携を考える機会としたいと考えた。

【①杉山氏の発表要旨】

急性期病院の看護師が退院支援を通して患者へどのような点を「気がかり」（気がかり：退院支援する際にこの患者には、気にした方が良く、考えておいた方が良くと考え支援したが退院後もそれがどうなったか気になっていること。）を感じたかについて実態調査した結果報告があった。

調査は病棟看護師のうち退院支援活動のリーダーとして活躍している退院調整委員9名を選出し質問形式で実

施した。方法は以下の通り。（1）疾患名、年齢、入院中の経過、（2）退院支援時の問題点、（3）退院支援の実際、（4）退院時の看護師としての不安点、（5）退院先（自宅、療養型病院、施設等）、（6）退院後の患者の経過について知っているか、（7）知っている場合：情報源（訪問看護師、施設の看護師、自院の地域連携室、家族、等）、経過を知った際の気持ち、以上の質問について症例を通して回答してもらい、「気がかり」の要因を抽出し、その要因の中で看看連携システムを用いて解決できる糸口を検討した。

結果：「気がかり」を感じた看護師は9名中6名だった。また退院後の患者情報を知っていたのは9名中3名だった。退院後の情報を確認出来た看護師からは嬉しかったという感想もあった。

演者からは、看看連携システムの充実により、急性期病院での退院支援の成否が確認でき、それにより支援の評価、質向上に役立つこと、かけふく（掛川・袋井）看看ネットワークや、情報交換会の重要性について言及があった。

【②平野氏の発表要旨】

「磐田市・森町の病院、訪問看護ステーションの看護代表者がつながる会」（以下、つながる会）は2015年から続く地域連携のプロジェクトであり、当時、磐田市立総合病院に在籍していた平野氏が発案したものである。このプロジェクトは、地域完結型医療提供体制の構築を目指し、病院、訪問看護ステーション、行政の代表者らが協力し合っている。

つながる会の対象施設は、病院10施設、訪問看護ステーション10事業所、行政2市町で構成されており、年4回の基本的な開催を通じて、年度ごとに具体的な活動目標が設定されている。これまでの活動内容は、関係づくりから始め、人事交流研修、連携へ具体化に向けて行動、課題解決に向けた具体的な行動など、各施設が抱え

1) 袋井市立聖隷袋井市民病院 病院長

る問題の共通認識を語り合い年々発展したものとなっている。コロナ禍でも活動は停滞することなく継続され、今後は地域完結型の医療体制の実現を目指し、“地域で最後まで暮らす”をテーマに住民との意見交換会が計画されている。今年度からは地域包括支援センターの看護職もメンバーに加わり、より地域の視点を取り入れながらつながる会を運営していく予定とのことであった。

【③赤堀氏の発表要旨】

訪問看護ステーション掛川は1998年に開設された。掛川市掛川区域で唯一のステーションとして、25年に渡り医師会や病院、診療所、介護支援機関など他機関との連携を深めながら訪問看護を提供している。訪問看護の役割は、病気や障害を抱えた人が自宅で自分らしい生活を送るためのサポートであり、そのためには本人や家族の希望やニーズを理解し、それに向けて協力することが不可欠となっている。また、看護師は病院、施設、訪問看護など、異なる立場からの看護の視点を持っており、一人の療養者に対しても、異なる機関や支援者が連携しながら療養者と家族の期待に応える必要があると考える。情報共有が不十分な場合もある中で、がん患者や非がん患者、身体障害者や精神障害者、小児など様々な状況に対応する必要がある。現在、ステーションは関わったケースを振り返って、看看連携や多職種連携に焦点を当て、今後の取り組みについて検討している。

【司会総括】

杉山氏の発表では、急性期病院で退院支援に関わった看護師の多くが、患者の退院後の状況に関心があるものの、必ずしも情報としては得られていない現状が示された。看看ネットワークや、患者に関する情報交換会の重要性が提示された。

平野氏の関与している「磐田市・森町の病院、訪問看護ステーションの看護代表者がつながる会」は、ある意味、看看連携の枠を超えた理想に近いプロジェクトと感じられた。今後、看看連携システム構築を考えていく際には大いに参考となるノウハウが示されている。

赤堀氏からは前方（地域移行前の病院等）関連組織との患者情報の共有が十分でない場合があることが強調された。その立ち位置が連携の最後尾となるので、現状では相当丁寧な情報共有を行わない限り避けられないのかもしれない。それでも長年の経験を通して行政も巻き込んで、精力的に様々な連携強化策を図っている旨も紹介された。医師も関連施設間の適切な連携を重視すべきことを意識させる発表だった。

各演者に時間をとって発表してもらったため、時間の

都合でフロアを含めたディスカッションが十分にできなかったが、参加者には患者中心の看看連携を考える貴重な機会となったと思われた。